

簡易キャンプにて。その日の夕餉が仕上がった。

レイリーはシチューの入った器とスプーンを手に取った。木製の器には干し肉と根菜が申し訳程度に浮かんでいる。

向かいに座るエリスもまた、無言のままスプーンを持ち上げた。ゆったりとスープをすくい、一口。静かに飲み込んでいる。

緩慢に、無表情のまま繰り返されるそれらの動作は、髑髏の戦化粧も相まって儀式めいた雰囲気さえあった。

(……不思議な人だ)

感情を表にしない、沈黙の男。

対面から初の共同任務。これまでレイリーが一貫して感じていたエリスへの印象を言葉にするなら、そんなところだった。

悪い男ではない……と思う。こちらが話しかける分にはそれなりに応じてくれるし、事務的なやり取りも問題はない。

無愛想というより無駄口を嫌うタイプなのだろう、とレイリーは勝手に合点している。

——だからといって休憩中まで仏頂面を貫くことはないだろうに。

内心そんなことを考えながら、自らも食事を済ませていると、儀式の主が唐突に口を開いた。

「君の食事、それでいいのか」

「え？」

レイリーの目が瞬く。思わず自分の皿を覗き込んだ。

堅焼きパンと、薄味のシチュー。栄養に不足はないよう調整しているつもりだ。

確かに量は控えめだが、腹が膨れすぎると動きの鈍さに繋がる。空腹にならない程度の、最低限の摂取で問題ない。

「ああ、はい。お腹に溜まると困るから量は抑えていますけど、栄養価は十分……」

「そういうことじゃない」

エリスがかぶりを振った。

「君は食事を、美味いと思っているか？」

いつも通り、抑揚のない静かな声だ。しかし、どこか重い。

レイリーは戸惑って、今一度その視線を自らの食事へ彷徨させた。シチューを口に含んでみるが、これといって不味いわけではない。



「味は……悪くはないですが」

「君は味を気にしないのか？」

「そりゃあ、美味しいに越したことはないですけど……」

——今の今まで無口だったのに、なんでこんなに食いつくんだ。

間髪入れないエリスの問いに、思わず口ごもる。

先ほどまでの咀嚼の風景を眺めていたレイリーとしては、エリスがそういったこだわりを持つタイプというのは予想外だった。

やや間を置いたが、レイリーは辛うじて続ける。

「でも、食事なんて栄養さえ補給できればそれで充分じゃないですか？」

食事は肉体を維持するための手段であり、味や見た目は二の次だ。レイリーはそう考えている。

彼の持論をどのように受け止めたのか。エリスの瞳がじっとこちらを見つめていた。

「君は、昔の私と似ている」

話が飛んだように感じて、レイリーは思わず眉をひそめる。

「……と、いいいますと？」



「私も昔はそうだった。食べられればそれでいいと思っていた」
スプーンをゆつくりとシチューに沈めながら、エリスが言葉を紡ぐ。

「でも、そうじゃない。なんというか……うまくは言えないが」

今度は言葉を探すように、僅かに息をついた。

エリスの言葉は、拙く、要領を得ない。が、それゆえに言葉の背景を想像させるような、奇妙な重さがあった。

「——ただ食べるだけでは、つまらない」

レイリーは思わず、目を見張る。

「つまらない、ですか？」

「ああ。ただ食うだけでは、火に薪をくべるのと一緒だ」

率直に言って、理解できない感性だった。

「楽しい」とか「つまらない」とか、レイリーは食事をそんな尺度で測ったことはない。生存に必要な行為。それ以上でもそれ以下でもない。

「だが、食事はそうじゃないと……ウェインが教えてくれた」

ウェイン——エリスの相棒であるオトモアイルーの名だ。

仕事の都合で今この場には居合わせていないが、二人がそれなりに長い付き合いであることは知っている。口ぶりから察するに単なる同行者以上の関係なのだろう。

それまで静謐を湛えていたエリスの瞳の中へ、微かに感慨の色が滲むのを、レイリーは見た。

「――すまない。妙な事を言ってしまった」

突然に話を打ち切ったエリスは、何事もなかったかのように食事を再開する。

素っ気ないエリスの態度を見て、肩透かしを食らった気分になる。

「ああ、いえ……。ご忠告、ありがとうございます」

気を取り直したレイリーが微笑んだものの、結局、それ以上の会話は続かなかった。後の食事は静かだった。互いが食事を終えるまでの間、レイリーはエリスの言葉の意味について考えていた。

エリスが自分から話題を持ち出したのはこれが初めてだ。沈黙や退屈に耐えかねて弄した、陳腐な雑談ではない。

ウェインの名前を引き合いに出したことからも、彼の中で大事にしている何かを、自分に伝えようとしてくれていた筈だ。

そのぐらいいはレイリーにも理解はできたが——真意を解するには、どうも自分という人間の中に足りないピースがあるように思えてならなかった。

それが、何か、とても残念な事である気がして。

食事を終えて器を片づけるエリスへ、レイリーはせめて問うた。

「エリスさんのシチューは……美味しかったですか？」

「——ああ。今日も良い食事だった」

日はすっかり落ちて、焚き火の光と音が、森の静寂へ滲むように広がっていた。